

特別シリーズII

※現在、さくらサイエンスプラザは新型コロナウイルスの感染防止のため、今年度のプログラムの実施を延期しています。

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプラザ』友情と感激 第223回

愛知県立大学の活動報告



片岡由美子 (愛知県立大学看護学部准教授)

日タイ交流プログラム

先端保健医療研究と看護師の高度実践を学ぶ

今回、日本・タイ両国のヘルスケア領域の発展に寄与するための交流展開を目的とし、2019年10月20日〜26日、タイのバンコク市にあるナワミンタラテイライト大学(NMU)クアカルン看護学部の学生10名、教員1

名を愛知県立大学へ招聘した。今回、NMU一行は本学において看護学部長らによる講義の受講、施設見学、各種演習を行うだけでなく、愛知県知事への表敬訪問を行った。また参加した学生全員にとつて初めての訪日ということで、茶道等、日本文化に触れる機会を設けさせていただいた。学生たちは初日のオリエンテーションに始まり、授業において、また施設見学においても常に礼儀正しく、真摯な態度で積極的に学ぶ姿が見受けられた。

① 受け入れプログラムの内容

研修内容に関しては、学内演習として、シミュレータを活用した呼吸音聴取と心肺蘇生法を、NMUの学生と本学の4年生を混在させた2チーム制で実施した。学生たちは励まし合いながら互いに手技を確認し、終了時には双方の学生が自然にコミュニケーションを取って関わり合っていた様子に、立ち会った周りの教員たちも目を見張った。

講義の例としては「プレパレーションの現状と課題」と題し、NMUの学生たちは、日本の小児看護におけるプレパレーションの歴史から、現在行われている内容や方法について実物を用いながら概略を学んだ。また、老年生活援助論において「高齢者のヘルスアセスメント」の演習に参加した際には、高齢者対象の新たな力テストの説明を受け、本学学生と共に平衡機能を調べる「閉眼片足立ち試験」などを体験した。

プログラム	
1日目	中部国際空港到着、宿舎オリエンテーション
2日目	愛知県立大学守山キャンパスオリエンテーション、キャンパスツアー 演習：「シミュレーションを用いた看護教育に関する学習」
3日目	講義：「超高齢社会における日本の地域包括ケアシステムの課題と展望」 講義：「小児看護学 プレパレーションの現状と課題」 ワークショップ：「日タイ、自国の看護」、日本人学生とのディスカッション
4日目	講義：「日本の看護教育制度について」 講義：老年生活援助論「高齢者のヘルスアセスメント」 講義・演習：分子生物学「疲労・ストレスのチェック：リアルタイムPCRによる唾液中 ヒトヘルペスウイルス6の検出」
5日目	愛知県立大学学長 表敬訪問 情報科学部研究室訪問(生体シミュレーションの研究成果) 国際関係学科ゼミ訪問(タイやラオスについて学ぶ学生との交流) 日本文化体験(色金山歴史公園茶室、名古屋城) 愛知県知事 表敬訪問
6日目	国立長寿医療研究センターの施設見学、部門長による講義 健康長寿支援ロボットセンター訪問 日本の健康食文化体験 あいち小児保健医療総合センターの施設見学、小児看護CNS、保育士・HPSによる講義
7日目	成果発表会：「日タイ、共通の看護問題へどう向き合うか」 修了書授与、懇親送別会
8日目	宿舎発、中部国際空港にてお見送り

生化学演習のひとつとして、疲労・ストレスチェックのためのリアルタイムPCRによる唾液中HIV6(疲労マーカー)の検出の原理、および手法を学んでもらう実験も企画した。学生たちにとつて生化学・分子生物学の実験は初めてというところで、予想以上に時間を費やしたが、全員、HIV6はネガティブで来日の疲労はみられず、初めて行う実験で大興奮しながら積極的に取り組んでいた。学外の施設訪問では、愛知県にある国立長寿医療研究センターで認知症専門病棟、健康長寿支援ロボットセンターの見学を行った。高齢者の生活支援ロボットの見学



疲労ストレスチェック 実験中



NMU学生と愛知県立大学生ら



小児看護学実習室見学



シミュレーション教育 演習風景

今回の受け入れプログラムに対しNMUからは感謝の言葉とともに、次は本学学生を招聘する旨、既に申し出をいただいている。世界的なコロナ禍の中、現時点で派遣事業の実施時期が見通せないが、今後、両校の定期的な交流が持たれることは間違いない。本学とNMUは学生の相互派遣を通じ、また、研究者間の情報発信を互に行い、アジアのヘルスケア領域における学びを高めていくことを目指している。

今回の受け入れにおいては、関与した本学学生の満足度は高かったが、対応した学生以外には交流が無かったことから、このような受け入れプログラム実施においては、なるべく多くの学生が関与できるプログラム内容の検討が望まれる。

③ 今後の展望

今回の受け入れにおいては、関与した本学学生の満足度は高かったが、対応した学生以外には交流が無かったことから、このような受け入れプログラム実施においては、なるべく多くの学生が関与できるプログラム内容の検討が望まれる。

今回の受け入れにおいては、関与した本学学生の満足度は高かったが、対応した学生以外には交流が無かったことから、このような受け入れプログラム実施においては、なるべく多くの学生が関与できるプログラム内容の検討が望まれる。

今回の受け入れにおいては、関与した本学学生の満足度は高かったが、対応した学生以外には交流が無かったことから、このような受け入れプログラム実施においては、なるべく多くの学生が関与できるプログラム内容の検討が望まれる。

では、NMUの学生たちはコミュニケーションロボット(赤ちゃん型)が対応によって表情や声を変化させることに驚き、歓声をあげながら代わる代わるロボットを抱き上げていた。

また、あいち小児保健医療総合センターの訪問では、小児看護専門「看護師(CNS)」によるセンタリの説明後、「ワックウ(クNS)」という、病棟の外にある遊戯室を見学した学生たちは、整備された遊具や設備を見て「カワイイ!」を連発していた。

② プログラム実施の成果

最終日にNMUの学生たちには今回のプログラムでの学びを成果発表として報告してもらった。この成果発表会の開催については、学内の教員、学生だけでなく、卒業生や近隣の医療従事者の方々へもSNSを利用して案内を出し、大学としての取り組みを紹介する機会とした。NMUの学生はタイの抱える健康問題と日本のそれとを比較して発表し、また、彼女たちがこの研修で得た知識や体験についてのプレゼンテーションを行った。終了後は、さまざまな質問や意見、また温かい激励のコメントがフロアから寄せられた。このプログラム実施に際しては学生アシス

タント、ないしはボランティアとして関わり、来日学生の誘導やサポートを行った本学看護学部4年生10名の存在があった。学生同士は初日から打ち解け、共に演習で学び合った。最終日には、NMUの学生から、本学の配慮の行き届いた対応に加え、心からの歓待に大いに感激したという感想が述べられた。

今回、「さくらサイエンスプラン」を通じての最大の恩恵は、本学学生たちの学びに対する意欲の向上と、看護の領域における熱意をタイの学生と共有する機会を持てたことだと言える。外国語教育の時間も十分取れない多忙な看護学部のカリキュラムの中、学んできた英語を懸命に駆使してコミュニケーションを取り、文化の差異を受け入れ共感を分かち合うことを物語っていた。その上、NMUのメンバーにはムスリムの学生もおり、日常生活で接する機会のない異文化に対する配慮を実体験し、社会的にどう対応すべきかを学ぶ機会にもなったようだ。一方、NMUの学生たちも、さらに将来的な日本での学びを希望し、今後の交流を期待する声がかれたことから、このプログラムが双方の学生にとって得難い体験をもたらしたと言えよう。